

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント

「特別上映会 甦る70mm上映『デルス・ウザーラ』』とその後に向けて 「第12回 オスロ70mm映画祭」報告

富田美香

Mika Tomita

70mm上映の復活に向けて NFCの試み

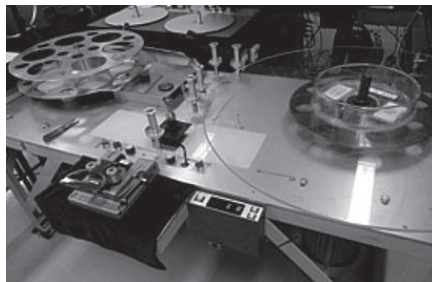
日本で初めて70mm映画が劇場公開されたのは1956年末(『オクラホマ!』フレッド・ジンネマン監督)だが、視界を覆い尽くさんばかりの大スクリーンに展開される美麗な映像と立体音響が奏でる70mm映画の“ゴージャス”な映画体験の魅力は、映画館へと人々を誘う強い吸引力を発揮したようである。一例をあげると、日本初の70mm映画となったスーパーテクニラマ70方式6本トラック立体音響の『釈迦』(大映、三隅研次監督)が東京有楽座と大阪の南街劇場で封切られた1961年10月末には、全国で41館もの70mm上映館の存在が整備中も含めて報告されている。その分布は、北は札幌から南は宮崎まで広がっており、大都市はもちろん、福井、長野、豊橋、岐阜、和歌山、姫路、福山、松山、熊本など、各地で70mm上映を楽しめる環境が整いつつあったことがわかる。残念ながらこれらの大半は洋画ロードショー館であったため、日本映画の70mmの試みは上映館確保の課題も大きな障壁となり、翌年に公開された『秦・始皇帝』(大映、田中重雄監督)と『太平洋戦争と姫ゆり部隊』(大蔵、小森白監督)の計3本、わずか2年の短命に終わることとなったのだが、他方で70mm映画の公開は、同年の『ウエスト・サイド物語』(ロバート・ワイズ監督)、1963年の『アラビアのロレンス』(デヴィッド・リーン監督)、1964年の『マイ・フェア・レディ』(ジョージ・キューカー監督)と、とどまることなく続いたのである。

それから50年が過ぎ、映画上映をめぐる環境が激変した結果、欧米各地では70mmやIMAX70mmの上映とその環境の維持が試みられているが、日本では70mm上映が可能な映画館は無くなり、70mm映画の文化も途絶えつつある状況になっている。

この状況を前にNFCでは、所蔵70mmプリントのリスト化に着手し、2014年には大ホールに35mm・70mmの兼用映写機Kinotonを入れ、その活用を前提に、国内での70mm上映復活に向けた準備を2015年度より本格的に開始した。

まずは相模原分館で、所蔵70mmフィルムの検尺と検査に最低限必要な器具や備品を整備

し、所蔵フィルムの状態を検査することから始めた。これにより明らかになったことは、収蔵プリントの大半が褪色率40~50%という残念な事実であるが、他方でパーフォレーションや磁気録音の磁性帯に傷みの少ない、映写可能なプリントも明らかになった。



▲IMAX用の巻き返し機を加工した検尺機

2016年度にはこれらのプリントによるテスト映写へと向かい、70mm用のリーダーや映写機の備品を確保した。大きな課題は、35mmと70mmの兼用映写機といえども、変更の際にはレンズから光軸、フィルムの走行するプレッシャープレートからゲートまで調整を行うことである。調整次第では映写の不具合や事故につながる危険があるため、映写トラブルを70mmの試写時でもその後の大ホールの35mmフィルムの企画上映でもおこさないよう、繊細な調節・調整が必要である。そのためテスト映写は休映・休館期間に行った。これら一連の作業の結果、『デルス・ウザーラ』(黒澤明監督、1975年)のテスト映写は成功し、映像も映写状態も良かったことから、プリントの再検査をあらためて入念に行うなど、2017年度のユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベントでの上映に向けた準備を開始した。

NFC開館後初となる70mm上映会の開催には至ったが、70mm上映を今後も継続していくには、上映可能なプリントの確保や調達の課題に加えて、プリント移送・検査・映写までの業務を円滑に行える体制作り、映写技師の長期的な確保など、多くの課題が山積している。70mm映画の保存と今後の上映に向け、このたびノルウェー映画協会が開催している70mm映画祭に参加し、ヒアリングを行った。

第12回オスロ70mm映画祭—— Size does Matter!

オスロ70mm映画祭は、ノルウェー映画協会

のシネマテーク2Fの大ホール(195席)を会場として、2000年から開催されている。2005年までは毎年開催だったが、第7回目の2007年以後は隔年となり、毎回夏を基本に10日間前後の会期で、平日は夜6時から2本、土日は昼から3本、計12本から17本の70mm映画が入替制で深夜まで上映される。

到着日に受付でチケットを購入しながら、映画祭スタッフTシャツに書かれた標語が目飛び込み、思わず唸り声と共に納得の深い頷きをしてしまった。「Size Does Matter! (サイズこそ問題だ!)」である。映画祭当初から使用されているこの標語は、途中「Size Still Matters!」、「Size Always Matters!」と変遷を経たが、今年再び戻って、日本からの参加者の強い共感を得ることとなった。

本映画祭のキュレーターを務めるヤン・オルセン氏(Jan Eberholst Olsen)は、1993年から同シネマテークで映写技師をしていた人物で、1999年に同協会のテクニカル・マネージャーとなり、翌年に70mm映画祭をたちあげ、現在は技術部長として映写関係の部門を一手に率いている。



▲ウルトラパナビジョン用のレンズに変更作業中のヤン・オルセン氏 映写窓からスクリーンのカーテンだけが見える

同協会での70mm映写の技術や機材とその改良については、オルセン氏の前任者トケル・ゼーターヴァーデットが執筆したFIAFの『映写マニュアル』(The Advanced Projection Manual, 2006)と、オルセン氏がFIAFのジャーナルに報告した「デジタル時代におけるアナログフィルム上映の維持」²⁾に詳述されているため、ここではフィルムアーカイブの理念とそ

の実現に絞って報告したい。

真正な70mm上映とその継続に向けて

オルセン氏が幾度となく力説したことは、二度と作成できない貴重な70mmプリントを傷つけることなく、本来の真正な上映を行うこと、50年後も100年後もシネマテークでは上映できるように対処する、という簡潔かつ微塵もぶれないフィルムアーカイブのポリシーである。実際に彼は、2009年のホールのリニューアルと共に、パーツの確保や改造をしやすい且つ収縮したフィルムの映写に適しているという点から、1960年代に利用されていたフィリップスのDP70/NorelcoAAを導入し、その後もスペア用の部品やDP70を探し続け、現在では6台もの同映写機を備蓄しているという。

大ホールに設置されたスクリーンは、10.5m幅のハークネス社のMatt White Previewで、大きくはない。然しながら、スクリーンに対してほぼ正対している階段式の座席とスクリーンとの距離が近く、映写距離18mからこのホール用にRosbeek Techniek社がカスタマイズしたIsco Ultra等の映写レンズで投影される映像は、スクリーン輝度30ftLを確保し、白の輝き、漆黒の艶も含めて非常にシャープな光沢を放ち、70mm映画の圧倒的な美しさを再現していた。また、同協会所蔵のビンテージプリント『北極の基地/潜航大作戦』(ジョン・スタージェス監督、1968年)の上映では、若干褪色はしていたものの、磁気録音の音響が非常にまろやかかつ重厚感に満ちており、その深みと温かみのある音質の再現を通して、70mm映画の立体音響の本質的な魅力を再認識させた。



▲上映会場 赤カーテンの中央に常にあたっているスポットライト

オルセン氏が言う真正な映写には、アスペクトから映写スピード、磁気録音の音質はもちろん、1950年代から60年代の多くの70mm映画にはついていた本篇前の前奏曲の時にカーテンにあてるライトから、前奏曲終了時にカーテンが開き、スクリーン上にロゴやファーストカットが徐々に姿を現すタイミングまでを含んでいる。映写室は、これらの映写を確実にできる設計がされていた。



▲絶妙な配置の映写機・丸椅子・映写窓・各種リモコン

映写室も常に映写技師が座って映写機の心臓部とスクリーンを見守るよう、映写機脇には丸椅子があり、そこから見える映写窓、その映写窓の真上に配置された各種リモコン、これらすべての位置とサイズがまさに、アーカイブのポリシーを示している。各種リモコンが秀でており、まず映写窓の真上にあるマスキング用リモコンは、ビデオ用とフィルム用あわせて18の設定がボタン一つで可能であり、左右上下を微調整するための6ボタン、計24ボタンが設定されている。フィルム用には、初期トーキーの1.19からスタンダードの1.37、トッドAOの2.21、ウルトラパナビジョンの2.76まで、8タイプが設定されている。この右上には、映写室の照明のリモコンがあり、更に映写窓の下には、左から、カーテンの開閉リモコン、その右下に場内の照明用リモコン、その右上にサウンドプロセッサのリモコンが配置されている。サウンドには、モノラル、磁気、ドルビーAタイプ、ドルビーSR、SR-D、DTS、SDDSのボタンが設定されている。

これらのリモコンは、2台のフィルム映写機、デジタル・プロジェクター、その他の操作卓すべてについており、どの位置からも効率よく完璧な設定を行うことができ、上映に集中しやすい施設となっている。70mm映写は、この映写室で最低必ず2名の体制で行っているという。



▲ミキサーとテープ再生機、投影字幕の操作卓 中央は映写窓から見える映像

もう一つの工夫は、Rosbeek Techniek社が映写機に設置したケルマー社のフィルム・クリーナーである。これは、埃の除去やウェットゲート効果で傷を見えにくくする効果があり、プリントをチェックした後に、必要がある場合はこのクリーナーを使い、その後、液筋が残らないように1、2度映写をするという。クリーニ

ングマシンを用意できない機関にとっては有効な設備といえるだろう。



▲クリーナーとDTS70mmリーダを合体

今回の上映作品は、映画会社のプリント、他アーカイブの所蔵プリント、自館所蔵プリント、の3種から構成されている。同協会の活動は、本篇70mmプリント購入時に特別提供されたという『ヘイトフル・エイト』の70mmテストプリントでレンズ交換時の映写チェックをしたり、『ダンケルク』のチームから寄贈されたバイクを上映会場のロビーに飾るなど、今後、70mm映画の文化を維持し保存していく拠点として映画界・映画人からも信頼されている様子が感じられた。NFCが踏み出したSize Does Matter!の一步が、非常に小さくかつ非常に重みのある一步であったことを、改めて実感する旅となった。

(フィルムセンター主任研究員)



▲ホール入口前のロビーに展示された『ダンケルク』のバイク

[参考]

第12回オスロ70mm映画祭(2017年8月25日～9月3日)上映作品

●映画会社所蔵のニュープリント

『アラビアのロレンス』(デヴィッド・リーン監督、1962年)

『クレオパトラ』(ジョゼフ・L・マンキーウィッツ監督、1963年)

『サウンド・オブ・ミュージック』(ロバート・ワイズ監督、1965年)

『2001年宇宙の旅』(スタンリー・キューブリック監督、1968年)

●他アーカイブ所蔵プリント

『シャイアン』(ジョン・フォード監督、1964年)

『あなたは私のもの(ドイツの日記)』(ソーンダイク夫妻ほか監督、1969年)

『シグナル』(ゴッドフリート・コルディッツ監督、1970年)

『情熱の生涯 ゴヤ』(コンラート・ヴォルフ監督、1971年)

●ノルウェー映画協会所蔵プリント

『北極の基地/潜航大作戦』(ジョン・スタージェス監督、1968年)

『ベンチャー・ワゴン』(ジョシュア・ローガン監督、1969年)

『ウォー・ゲーム』(ジョン・バダム監督、1983年)

『トップ・ガン』(トニー・スコット監督、1986年)

『インターステラー』(クリストファー・ノーラン監督、2014年)

『ヘイトフル・エイト』(クエンティン・タランティノ監督、2015年)

*本調査はJSPS科研費JP16KK02356(「70ミリ映画のアーカイブにむけた基盤形成」)の助成を受けた。

註

1 「すくない七〇ミリ劇場」『合同通信映画特信版』1961年10月29日、845号、4頁。

2 Jan Eberholst Olsen, "Maintaining Analogue Film Projection in the Digital Age," *Journal of Film Preservation*, 94(2016), pp.53-58